

社会主義期ハンガリーにおける歴史言説の一考察

——ギムナジウム歴史教科書に見る「1956年」——

倉 金 佳

はじめに

1956年10月末、ハンガリー人民共和国の政治・社会状況は、極度の混乱に陥っていた。ハンガリー政権内部で再三繰り返された人事異動、あるいはハンガリー治安当局・ソ連軍に対するハンガリー「人民」による徹底抗戦の様子は、これと同時期に進行しつつあったスエズ危機とともに、全世界に衝撃をもって伝えられた。今日のハンガリーでは、「1956年の革命、および自由への闘争 *forrádalom és szabadságharc*¹」と呼ばれ、日本では、「ハンガリー革命」・「ハンガリー事件」・「ハンガリー動乱」・「ブダペシュト蜂起」などの名称で人口に膾炙されている出来事である(以下、本稿で同事象について言及する際、特別な配慮を要する場合を除いて、呼称を「56年」で統一することとし、便宜上その指示範囲を〈10月23日から11月4日の期間にハンガリー周辺で起きた一連の事件〉に限定して議論を進める)。

「56年」の1つの政治的な帰結として、社会主義労働者党(勤労者党の解党に伴い、56年11月1日に新規結党された前衛政党政)書記長のカーダール・ヤーノシュ率いる「革命労農政府」が組閣された。カーダールは、その後32年の長期にわたり、当時の社会主義諸国にあって比較的安定した政権を築きあげることに成功した。このカーダール長期政権を支えた屋台骨は、一般によくいわれているように、ソ連のペレストロイカを20年先取りしていたとも評される漸進的な経済改革であった。

ところで、結果的には長期政権となりえたものの、カーダール体制の内外における比較的前向きともいえる評価は、発足当初から自明なものだったわけではない。というのも、56年11月4日、当時在野勢力から広く支持されていたナジ・イムレ政府を見限り、ソ連の軍勢力を後ろ盾として新政権を樹立した人物こそ、カーダールに他ならないと目されていたからである。カーダールはその上、ナジ政府の倒壊後も国内各地で依然執拗な抵抗を続ける労働者評議会の武力制圧を強行し、ナジに対する死刑執行(58年6月17日)をはじめ、暴動参加者に対しては容赦のなく厳罰を下していった。また、ナジによって一時中断されていた農業集団化を再開し、62年までに完了させるなど、国内秩序の一層の引き締めを行っていった。その徹底ぶりは、しばしば「ブダペシュトの屠殺者」と揶揄されるほどであった。しかし、農業集団化が完遂した頃から、カーダールは徐々に政策方針の変更を図るようになった。つまり、それまで厳罰に処せられていた政治犯には恩赦が与えられ(61年)、経済改革や自由化が——あくまで漸進的、部分的にはあったが——推し進められたのである。こ

うした一連の政策の変化は、「報復」から「融和」へ、あるいは旧来のスターリン主義的な「ハードな共産主義」から、「ソフトな共産主義」へのパラダイム転換として評価されることもある。²

さて、先ほど一定程度の自由化政策が遂行されたと書いたが、とりわけ体制の言論活動に対しての寛容さは従来から注目されてきた。実際、所謂「3つのタブー」に抵触しない限りにおいて、たいていの言論活動は、当局の検閲による処分を免れていたといわれる。では、言論の自由が認められていなかった「3つのタブー」とは何か。それは一般的に、近隣諸国におけるハンガリー系マイノリティ問題、国内の駐留ソ連軍問題、そして一連の「56年」問題を指す。先に触れたように、カーダール政権が満を持して成立したわけではないことを鑑みるならば、同政権が自らの正統性を根底から揺るがしかねない案件(ナジ政府の転覆、ソ連軍の「第二次介入」)について公式の場で語ることを——暗黙裡にはあるけれども——禁じていたことは、容易に納得できるはずである。

にもかかわらず、カーダールは本来なら触れたくないはずの過去を公の場で語ることによって、逆に体制に有利な状況を作り出すことにさえ成功したといわれている。つまりカーダールは、ハンガリー国民の指導者としての立場を最大限活用して「56年」を語ることによって、国民の支持および共感を勝ち取る術を見出していた人物として考えられているのである。こうしたカーダールの事例から帰納的に推測するならば、当局者にとっての「56年」問題は言論上のタブーというよりはむしろ、国民融和策の成功の鍵を握る魅力的な資源ではなかっただろうか。

この疑問に答えるべく1つの試論として、本稿では、「56年」以後の社会主義建設期、すなわちカーダール時代(56年11月-88年6月)を対象に、「56年」がハンガリーの教育現場においてどのように取り扱われていたのか、実際当時使用されていたギムナジウム歴史教科書の記述分析を通して考察してみたい。無論、ギムナジウムの歴史教科書を分析対象とするのには理由がある。ハンガリーのギムナジウムは、日本の現行制度でいうところの全日制普通科高等学校に相当し、大学への進学を希望する者には、ギムナジウムの卒業が義務付けられている。つまりギムナジウムは、ハンガリー中等教育のなかで最も高度な学術教育が行われる機関であった。さらに、そうしたギムナジウムにおける歴史科は、「世界史、およびハンガリー史を概観、あるいは秩序立てて理解させることによって、生徒が初等教育において身につけてきたマルクス=レーニン主義史観をさらに発達させる³」という教科目標のもとに運営される、当局にとっては事実上の最重要教科に他ならなかった(実際、他の専門学校等の教科書に比して、ギムナジウム教科書の内容は質、量ともに優れている)。以上のような事情を踏まえるならば、ギムナジウムの教科書こそが、当時の労働者党当局の志向する教育方針ならびに内容を最も忠実に反映していたものと判断できるため、筆者はこれを本稿での分析対象として選ぶことにしたわけである(ちなみに、トピックとしての「56年」は、第一次大戦後を教授範囲としている第4学年用の教科書にのみ掲載されている)。

こうしたギムナジウム歴史教科書のテキスト分析を通じ、本稿は、レトリックや言語使用の観点から、「56年」をめぐる学術的言説の通時的(不)変化について一考察を試みるものである。とはいえ、各教科書の記述に、当局の意向がどれだけ反映されていたのかを推察するためには、主題に先駆けて、「56年」をめぐる党の公式評価を確認しておく必要がある。まず、党公式見解について、簡単にまとめておきたい。

所謂カーダールの「報復」体制⁴によって、「56年」以来混乱を来たしていた国内秩序の「正常

化」が進められていた頃、56年12月2日から5日にかけて開かれた労働者党中央委員会では、「56年」勃発の原因について討議され、これを引き起こした4つの要因とその主体について特定がなされた。当評価によれば、これら特定の要因・主体の数々は、「1956年10月以前から、相互に結合しあい、影響を及ぼしあいながら、部分的には事件を悲劇的に進行させた」という。⁵ 4つの要因は次のとおりである。

- ① 1948年末以来、勤労者党中央委員会、ならびにハンガリー人民共和国政府において、絶大な影響力を誇っていた、ラーコシ=ゲレー派は、マルクス=レーニン主義の根本原則から逸脱し始めた。
- ② 10月事件の制圧、および悲劇的結末において、決定的な役割を担っていたのは、ナジ・イムレとロションツィ・ゲーザ⁶周辺に集まって、最近数年のうちに発達し、持続的に影響力を増しつつあった、党内の反対分子であった。
- ③ ホルティ=ファシスト、およびハンガリー資本主義者といった反革命家たち、そして地主たちが、10月事件の準備と攻撃の基本的なファクターであり、それらの重要な勢力は、ハンガリー国内で不法に活動していた。
- ④ ハンガリー問題にとどまることなく、より広範囲にわたって目標を掲げていた国際帝国主義も、ハンガリー事件において決定的、かつ重要な役割を演じた。⁷

以上、中央委員会の総意として発表された「56年」評価は、やがて「体制転換」期に党内改革派の主導で再評価作業が着手されるまでの間、大筋において変更が加えられることはなかった。⁸ つまり、先に述べたように、カーダール体制は言論活動に対して比較的寛容な姿勢を示してはいたものの、当時の国内の政治家や学者は、以上の「4つの要因」を無視して言及することはできなかったわけである。

1. 歴史教科書(1960–1988年)の「56年」記述に見られる特徴

続いて、本題であるカーダール時代のギムナジウム歴史教科書の「56年」記述についてテキスト分析に移りたい。対象となるのは、以下に挙げる教科書である。

- 1/ Szamuely Tibor, Ránki György és Almási János, *Történelem Az Általános Gimnáziumok IV. Osztálya Számára II. Kiadás* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1961) 『歴史 普通科ギムナジウム4学年用』
「56年」記述が見られるハンガリー最初の歴史教科書。⁹ 1960年に初版が発行され、第6版(1965年)で改訂が行われている。改訂版では、レイアウトの変更は認められるものの、記述面での変化は認められない。ちなみに初版は、「56年」以前までの時期しか扱っていない。そのため、第2版[以下 Szamuely eds. (1961) と略]を用いる。
- 2/ Balogh Endre, *Történelem A Gimnáziumok IV. Osztálya Számára* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1968); *VIII. Kiadás* (1975) 『歴史 ギムナジウム4学年用』
初版は1968年に、改訂版は1975年に出版された。初版[以下、Balogh (1968) と略]と改訂版[以下、Balogh (1975) と略]の両者が分析対象となる。

3/ Jóvérné Szirtes Ágota, *Történelem a gimnáziumk IV. osztálya számára: A legújabb kor története* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1982) 『歴史 ギムナジウム 4 学年用 現代史』

1982 年の初版以来、1988 年までの期間用いられていた。分析には初版[以下、Jóvérné Szirtes (1982) と略]を用いる。なお、1989 年には、この教科書の改訂第 6 版 Jóvérné Szirtes Ágota & Sipos Péter, *Történelem A Gimnáziumk IV. Osztálya Számára: 1914–1945 VI. Átdolgozott Kiadás* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1989) が出版されたが、対象となっている年代からも推察できるように、「56 年」を取り扱ってはいない。¹⁰

ハンガリーでは社会主義期を通じて、単一の学習指導要領と国定教科書によって特徴づけられる「国家の授業」が行われていた。カーダール時代のギムナジウム歴史教科書は、以上に挙げた 1~3 で全てが網羅されている。以下では、これらの教科書の初版(1 については第 2 版)、および 2 の改訂版の合わせて 4 通りの歴史教科書に見られる、「56 年」(時期としては 1956 年春~カーダール政権成立まで)を扱ったテキストを対象に、教育現場で扱われる「56 年」、あるいはカーダール体制成立をめぐる諸言説から見出せる特徴について示そうと思う。具体的には、それぞれの教科書が、「56 年」の前夜(56 年春~10 月 23 日)、経過(10 月 23 日~11 月 4 日)、結末・評価(11 月 4 日~57 年)をどのような論理図式を用いて説明しているのか明らかにした上で、「56 年」の諸事件、ならびにそれらに参与していた(とされる)動作主体の数々が、どのような語彙によって表象されているのか、言語使用論的な観点からの分析を試みる。

1.1. Szamuely eds. (1961)

1.1.1. 前夜 (pp. 276–277)

1956 年の「反革命」を直接引き起こしたファクターは、一括して「反革命勢力」の名で呼ばれている。しかし、同勢力がどのような人々で構成され、どのような組織系統を持っていたのかなどについては、一切触れられていない。その代わりに、同勢力と繋がりを持っていたファクターとして、「米国と共同歩調を取る西側帝国主義勢力」、「ナジ・イムレ周辺で派を成していた修正主義者たち」の存在が挙げられている。まずは、これらの関係についてまとめておく。

「米国と共同歩調を取る西側帝国主義勢力」は、所属「諜報機関」を活用して、あらかじめ「反革命勢力」との接触を図っていた。そのため、「反革命勢力の拠点」は、「人目につかないところで」、攻撃開始以前から組織化されていたという。ちなみに、この動きを助けた「諜報機関」の代表格として挙げられているのは、米国系資本の「自由ヨーロッパ放送」である。このことから、批判の矛先が向けられている「西側帝国主義勢力」の中でも、とりわけ米国に対しての敵意が露骨に表明されていることが見て取れる。

一方、「ナジ・イムレ周辺で派を成していた修正主義者たち」は、「反革命におけるもう 1 つのグループ」、「抵抗分子」ともいい換えられている。彼らを「抵抗分子」と呼ぶ根拠は、「反人民民主主義」を煽動し、「反革命勢力」ならびに「外国の指導者」と、「反革命」の準備を共同で行ったことに求められている。とはいえ、「修正主義者たち」、「反革命勢力」とは具体的には誰を指しているのか、明言は避けられている。殊に「外国の指導者」に関しては、「米国と共同歩調を取る西側

帝国主義勢力」の指導者であるのか否かですら、明らかにされていない。全体的に正確さを著しく欠いていることがわかる。

以上を総合すると、この箇所でも読み手が理解すべき内容は、次のように要約されるだろう——「56年」における「反革命」攻撃を直接担ったのは、(正体不明、あるいは不特定多数の)「反革命勢力」である。とはいえ、諜報機関を通じてその前段階における組織化を助けた「米国と共同歩調を取る西側帝国主義勢力」、ならびに、攻撃準備を共同で進めた「ナジ・イムレ周辺で派を成していた修正主義者たち」の、間接的ファクターとしての罪責が問われていることも見逃すべきではない。

1.1.2. 経過 (pp. 277-278)

この部分の特徴は次の3点に集約される。

第一は、10月23日のいつ、どこで、どのように「反革命攻撃」が開始されたかについて、詳細な説明が何1つなされていない点である。テキストから認められるのは、①「修正主義の煽動者」による「学生デモ」の組織化、②「惑わされてしまった」学生たち、③党施設の占領をめぐる銃撃戦への、脈絡のない話題の転換である。一目瞭然、②と③の間には、時間的・空間的な断絶が認められる。そのため、この記述からだけでは、「学生デモ」と、銃撃戦＝「反革命攻撃」との直接的な関連は浮かび上がってこない。

第二は、10月24日に、「国内では、2つの拠点が生じ」、その片方「非公式の拠点」が、「ナジ・イムレと行動を共にする修正主義者たちの秘密の拠点」と説明されている点である。テキストによれば、この拠点こそが、「暴動の武装集団と常時繋がりを持ち、その指令中枢となっていた」のだという。これは、謂わば論理の巧妙な摩り替えである。つまり、先の前夜に関する部分では、「反革命攻撃」を直接担った主体こそが、「反革命勢力」＝武装集団として扱われていたのに対し、ここでは、武装集団よりさらに上位に位置する統括主体として、「修正主義者たちの秘密の拠点」が再定義されているのである。つまり、「修正主義者たちの秘密の拠点」と「反革命勢力」とが共犯と見なされているのである。さらに、この記述に直結する形で、もう片方「公式の拠点」＝「ナジ・イムレおよび彼のグループ」が「共産主義者の仮面を脱ぎ *levette kommunista álarcát*、明らかに裏切りの道を歩みだした」ために、「革命勢力は解体し、階級の敵(＝「反革命勢力」)による流血テロルがはびこるのを許してしまった」とする説明も続いている。したがって、最終的に読み手の印象として残るのは、「ナジ・イムレと協力者たち」＝「反革命勢力」という曲解された図式ではなからうか。

そして第三は、「反革命勢力」だけでなく、前夜部分には見られなかった「革命勢力」という用語もまた、随所に散りばめられている点である。とはいえ、読み手は、この時点で「革命」もまた——「反革命」とは別個の存在として——同時進行していたと解釈するよりは、むしろ「反革命勢力」に対峙する「プロレタリア独裁の勢力」、「プロレタリア独裁を目指す忠実なる労働大衆と組合」が、「革命勢力」といい換えられていると考えるべきかもしれない。これは、「公式の拠点」の要職についていた「ナジ・イムレおよび彼のグループ」が翻意したために、「人民民主主義を防衛する準備の出来ていた革命勢力」が解体してしまったとする記述や、「(反革命)に対して」「破壊的な反撃は決して行われることはなかった」とする記述、あるいは、「重大な問題を引き起こした

旧指導部の一人」として描かれているゲレー・エルネーの無能さと対照させながら、同勢力についてポジティブな表象を繰り返していることなどからも説明できるだろう。

1.1.3. 結末・評価 (p. 278)

先に見たように、経過部分では、「革命勢力」という用語は目につくものの、その具体的な主体名については言及されていなかった。結末部分に至って、ついにその正体が明らかにされている。つまり、カーダール・ヤーノシュを首班として成立した「革命労農政府」が、「革命勢力の拠点」として描き出されているのである。(ちなみに、本書では、「革命勢力の拠点」の成立した日付が、所謂「ソ連軍第二次介入」当日の11月4日ではなく、「11月2日」となっている。この点にも注意が必要だ)。

興味深いことに、本書の「56年」関連の記述を通じて、カーダール・ヤーノシュ個人の名が登場するのも、実はこれが初めてである¹¹(例えば、勤労者党第一書記への就任[10月25日]、ナジ政府への入閣[10月30日]¹²などの事実については一切触れられていない)。つまり、「革命労農政府」が成立する以前の彼の動静については何ひとつ明らかにされないまま、「革命労農政府」の首班・勤労者党第一書記への就任という出来事において、突如として彼の名が言及されているのである。このことから、カーダールがあたかもナジ・イムレならびに「修正主義者たち」と首尾一貫して関与していなかったこと、さらには「全ハンガリーの愛国者」を「国民として結束」させるに足る指導力(10月23日、ゲレーはこれに失敗している)があることを印象付けるような演出になっているわけだ。

もう1つ着目すべきことがある。これまでの記述中には見られなかった「人民」という用語が、結末部分で初めて用いられているのである。それは、(本文では斜字体で強調されている箇所でもあるが)ソ連軍による2度目の「解放」によって、「人民はファシズムの脅威から解放された」とある¹³(加えて、ソ連軍に犠牲が出たことも確認されている)。「ファシズムの脅威」とは、今日的な視点からすれば、いささか誇張表現であるが、「反革命」の延長と置き換えることもできよう。したがって、「反革命勢力」は「人民」とは見なされず、当局が(立脚する対象として)想定する「人民」とは、「我が国に忠実な勢力」、「全ハンガリーの愛国者」、あるいは「ハンガリー労働人民」に限定されることになるわけである。「革命労農政府」は、このような「人民」に対して「国民として結束」を呼びかけ、勤労者党は「社会主義へのさらなる道を切り開くことに取り組んだ」と結ばれている。ナジ・イムレが、「反革命勢力」と関係していたとする先の記述もあるがゆえ、こうした説明を行った著者の側には、ナジとカーダールの政治的立場性に、超え難い差異があることを際立たせようとする意図もあったのだろう。

ちなみに、この両者の差異を浮き彫りにする意図は、勤労者党の新規結党に関する説明が、非常に簡素化されていることからも見出せる。というのも、実際の新規結党は、既に11月1日時点で完了しており、その創立者メンバーの中にはナジ・イムレの名もあった。¹⁴ 日付の不明確な記載(「11月最初の数日間のうち…新規結党が既に開始されていた」)、ならびにナジ・イムレの関与についての言及の排除、さらには、勤労者党が「修正主義者たちによって解体された」とする説明によって、あたかも勤労者党の新規結党が、完全に「革命の拠点」での出来事であったかのように描

かれているのだ。

ところで、この結末部分の小見出しは、「革命勢力の勝利と反撃」となっている。しかしながら、「革命勢力」が何に対してどのような勝利を収めたのか、再三見てきたように、結局本文からは窺い知ることは出来ないのである。つまり、ソ連軍によって、「人民」が「ファシズムの脅威から解放」されたと述べられている程度で、ナジ政府の終焉、あるいは「ナジ・イムレと協力者たち」のその後の動向などについては少しも触れられていないのである。穿った見方をするならば、これは、ソ連軍の武力制圧を「人民の解放」と定義し、またソ連軍側の犠牲者について確認するかわりに、「56年」の悲劇的結末の重大な責任をソ連に負わせ、さらには「ナジ・イムレと協力者たち」への言及を結末部分から抹消することによって、11月4日以降に起きた一連の出来事を、恣意的に忘却しようとする意図も見えなくはない。本書が、「56年」からわずか5年足らずで出版されたという背景からも、このように推測することは可能と思われる。

1.2. Balogh (1968); Balogh (1975)

続いて見ることになる2冊には、改訂による記述の変更も幾つか認められる。重要な変更点については、随時文中では ____ [], あるいは脚注で指摘するが、原則的に記述の引用は Balogh (1975) を代表させている。また、この節以降では、前節でのテキスト分析の鍵となった各論点について比較を行いながら、それらの共通点と相違点について検証することにする。

1.2.1. 前夜

① 「国際帝国主義」、「外国帝国主義勢力」(p. 318)

Szamuely eds. (1961) に比して米国の果たしていたとされる役割が詳しく述べられ、記述の米国批判の度合いも増している(「1955年春、米国は既に、世界共産主義に対峙する政治攻撃プログラムを作成していた¹⁵⁾。また、「帝国主義の計画」の1つが、「ハンガリーでの資本主義の復古¹⁶⁾」に置かれていることが明記されている。しかし、「帝国主義」が、「反革命勢力」等の事前組織化を助けたとする従来のような断定的な説明は見られない。

② 「修正主義者たち」(p. 319)

「ペテーフイ・サークル内に組織された『専門討論 szakmai viták』の場で、公然と社会主義に対して攻撃を始めた¹⁷⁾」とされるこの主体は、「反『民主主義』を掲げている反革命家たち」ともいい換えられている。そのため従前に見られたような、「修正主義者たち」=企画担当と、「反革命勢力」=実行担当との間の線引きは、曖昧になっている。また、「外国の指導者」と共同準備を行ったとする説明も無いことから、全体として「修正主義者たち」に「反革命」の責任の大部分を負わせる記述になっている。しかし、従前のような「ナジ・イムレ周辺の」という修飾語も排除されているため、責任の所在が完全に宙に浮いてしまっている。

③ 新たに登場する主体: 「勤労者党レーニン主義者勢力」、「セクト主義者グループ」(pp. 318-319)

「セクト主義者グループ」は、1951-52年にかけての経済、政治上の失策、ならびに強権政治に

よって党-労働大衆間の結合関係を弱体化させた張本人として描かれている。しかし、彼らは自発的に失策を正すどころか、これを拒絶した挙句、「セクト主義者勢力の失策を克服し、修正主義者の攻撃を打破」を試みた「勤労者党レーニン主義者勢力」の是正努力をも「覆い隠して」しまった。この説明は、仮に試みが覆い隠されなかったならば、「勤労者党レーニン主義者勢力」が、「セクト主義者勢力の失策を克服し、修正主義者の攻撃を打破」していたに違いないとするコンセンサスとして収束する。したがって、「56年」勃発の要因として、「セクト主義者グループ」にも重大な責務が負わされていると考えられる。

一方、改革者として登場する「勤労者党レーニン主義者勢力」は、「修正主義者」、「セクト主義者グループ」との対比で、ひときわポジティブな存在として浮かび上がってくる。テキストによれば、同勢力は、「セクト主義者グループ」が仕組んだ、「暴力的な、所謂『仕組まれた』禁固刑“konceptió” pörök börtön [Balogh (1971), pp. 298–299: 「仕組まれた」ショー・トライアル“konceptiósperek” elmarasztaló ítélet]によって、自白が強要された上に、有罪判決が下された」ことのある「教義に忠実な共産主義者たち¹⁸⁾」ということになり、該当する人物として、カーダール・ヤーノシュとカーライ・ジュラ¹⁹⁾の名前が挙がっている。

1.2.2. 経過 (pp. 319–320)

「1956年10月23日午後、民衆が興奮状態にあった首都ブダペシュトにて、デモ行進を企図した」のは、「秘密の、あるいは表向きは仮面を被っていた反体制組織の数々 [Balogh (1971), p. 300: 非合法的、あるいは半合法的反革命組織の数々]」であった。注目すべきは、「デモ行進」を企画した主体が、Szamuely eds. (1961)、Balogh (1968)、Balogh (1975)の三者間で、それぞれ異なっている——「修正主義の煽動者」、「反革命組織の数々」、「反体制組織の数々」——ことである。先に述べたように、Balogh (1968)では、Szamuely eds. (1961)では認められなかった、「修正主義者たち」を「反革命家たち」と同一視する見解が登場している。この図式から類推すれば、「反革命組織の数々」のうち相当の組織が、「修正主義者たち」によって指揮されている、あるいは少なくとも彼らを内包していることになるだろう。つまり、主体の持つ意味合いの方向性にこそ大差はないものの、その指示する範囲は意図的に抽象化されていることがわかる。この傾向は、Balogh (1975)で、「反体制組織の数々」という主体語彙が選択されることによって、一層強まっているといえるかもしれない。

続く「反革命」勃発以降の状況に関する記述では、Szamuely eds. (1961)の説明論理とは明らかに異なる点がいくつか認められる。第一に、「2つの拠点」が存在していたとする先の論法が用いられていない点である。ナジ・イムレが首相へと就任し、これを受けて状況の右傾化が起り、「白色テロル」が横行した——と描写されているが、従前のような、ナジ政府と「反革命家たち/反革命勢力」との間に何らかの連絡があったとする記述は見られない。

第二に、「民族主義とファシズムの潮流の前に、資本主義への門が広々と開かれてしまった」とする記述がなされていることが挙げられる。その細部は、「反革命家たち/反革命勢力」が、『革命に向けた』弁明によって、社会主義信奉者たちを欺き、麻痺させ、「首都の党委員会共和国広場支部」の「守備側の大部分を惨殺し」、「ミンツェンティ枢機卿²⁰⁾を監禁状態から解放」するに至っ

た——と描写されている。つまり、この時点で既に、「反革命家たち / 反革命勢力」の目標が、「資本主義への門」の開放であったと断定がなされている。この論理に基づくならば、「資本主義への門」の開放を受け持つような動作主体は、到底社会主義者・共産主義者ではありえず、「修正主義者たち」と呼ぶこともできないはずである。したがって、この主体の呼称を、「反革命家たち / 反革命勢力」に限定せざるをえない状況は、実は著者によってあらかじめ生み出されていることがわかる。このことを如実に表すかのように、ナジが「反革命暴動に反対する立場を表明し、勤労者党中央委員会に対してその鎮圧を約束した」ことが、新たに補足説明されてもいる。そのため、(後に入閣したとされる「より復古的な分子」ではなく)ナジ個人と「反革命家たち / 反革命勢力」との間に明確な境界線が引かれているのは確かであろう。

1.2.3. 結末・評価 (pp. 321–322)

ここではまず、「新しい革命の拠点」に関して言及がなされている。この拠点は、「社会主義革命の継承者」、すなわちカーダール・ヤーノシュ率いる「ハンガリーの共産主義者たち」によって組織された、「新しい中央委員会と革命労農政府」を示唆している。これを、既出の Szamuely eds. (1961) の結末部分に見られた「革命勢力の拠点」についての記述と比較してみると、「革命勢力 [Szamuely eds. (1961)]」が「新しい革命 [Balogh (1975)]」といい換えられているだけでなく、「社会主義革命の継承者」・「ハンガリーの共産主義者たち」・「新しい中央委員会」の3つの語句が、新たに使い分けられていることがわかる。では、一体これは、どのような効果を見込んでの処置だろうか。

Balogh (1975) では、「革命」についての言及は、経過部分までは一切なされていない。つまり、ここで言及されている「革命」は無論、プロレタリア独裁と同義である。それゆえ、「社会主義革命の継承者」という極めてイデオロギー色の強いジャーゴンが与えられているのだろう。

一方、ナジの政治的立場性に関する記述を探してみても、そうした箇所は、原因・経過部分では一切見当たらないことがわかった。つまり、ナジは少なくとも「ハンガリーの共産主義者たち」に含まれていないことが、既に暗示されていたのである。ちなみに、本書全体を通じて、「共産主義者たち」のアイデンティティを付されているのは、専ら「勤労者党レーニン主義者勢力」に対してだけである。つまり、カーダールやカーライといった「暴力的な、所謂『仕組まれた』禁固刑によって、自白が強要された上に、有罪判決が下され」たこともある「教義に忠実な共産主義者たち」が該当するのであり、裁判によって失脚した経験を持たないナジ・イムレは対象外となるわけである。また事実、参加できなかった以上、ナジは「新しい中央委員会」からも排除されているわけであるが、これを説明することによって見込まれている効果はそれだけに留まらない。というのも、「新しい中央委員会」の一語が挿入されることによって、(ナジ政府ではなく)「革命労農政府」こそが、労働者党の「新しい中央委員会」に依拠しているという図式が自然に強調されるからである。つまり、仮に、11月1日にナジ・イムレもまた労働者党結党メンバーに名を連ねていた事実などが(教育現場において)万が一に話題になったとしても、「新しい中央委員会」が「社会主義革命の継承者」の必要条件として前面に押し出されているがために、ナジ政府の正統性について疑問を差し挟む余地はもはや残されていないのである。

このように、ナジの政治的立場性はテキスト内で一度も問われるもなく、「新しい革命」以降の記述からは、彼の存在自体が抹消されてしまっている。一方、カーダール・ヤーノシュについては、「社会主義革命の継承者」として突然登場する 1956 年 11 月 4 日以前の動静について、Szamuely eds. (1961) と同様、テキストは何ひとつ物語ってくれない。

続いて、ソ連軍事介入をめぐる記述についての考察に移りたい。「革命政府」は「反革命」を制圧するにあたり、ソ連に対して「援助を要請した」という。その理由としては、「人民民主主義政府の武力」が、「反革命」によって攪乱させられていたことが挙げられている。さらに、Balogh (1975) の改訂に至っては、新たに、「プロレタリア国際主義に基づいて、軍事力の援助を要請した」という理由が付け加わっている。ちなみに、Szamuely eds. (1961) が「援助」要請理由として引き合いに出していたのは「ワルシャワ条約」であった。また、自国軍隊が「反革命」によって混乱を来たしていたとする従来のような弁明もなされなくなっている。逆に、Szamuely eds. (1961) に見られたような、政府が「全ハンガリーの愛国者に対して、国民としての」結束を求めたことと言及、あるいはソ連の軍事介入を「我が人民の解放」と称えるような記述は一切排除されている。このように、Szamuely eds. (1961)、Balogh (1968)、Balogh (1975) の間に、記述の大きな揺れが認められるが、これだけの変化が見られる箇所は極めて稀な例といえる。

1.3. Jóvérné Szirtes (1982)

1.3.1. 前夜

① 「外国帝国主義グループ」(p. 186)

この主体は、社会主義陣営における暴動の発生、あるいは解体を、「ハンガリー国内」の仲間と成し遂げようとしていた。この「ハンガリー国内の仲間」(「反革命集団」ともいい換えられてもいい)の活動には、「ホルティ主義者、王朝主義者、矢十字党の残党たち」も多数加担していたという。何はともあれ、基本的な論旨は、「内なる資本主義復古勢力と国際帝国主義の連合が、プロレタリア勢力に対して抵抗した」とする、Balogh (1975) の説明図式を踏襲した形となっている。しかし、「帝国主義」主体の修飾語は、あくまで「外国」なのであって、従来に見られたような「米国」・「西側」・「自由ヨーロッパ放送」などといった、対象を大なり小なり絞り込む語彙は一切用いられなくなっている。したがって、Jóvérné Szirtes (1982) における「帝国主義」はもはや重要なファクターとして見なされてはいないような印象さえ受ける。

② 「修正主義者グループ」/ナジ・イムレ (p. 186)

この主体に関する記述量は著しく減少している。従来のような、「修正主義者たち」が「反革命家」、「煽動者」としての役割を担っていたと論じるような記述は全く見当たらない。とはいえ、「ナジ・イムレ周辺」は依然として、「右派」的色合いの濃い主体として描かれている。

③ 「ラーコシ派 Rákosi-csoport」・「ラーコシー味 Rákosiék」(p. 186)

旧指導部をいい表すのに、従前の Balogh (1975) では、「セクト主義」・「教条主義」といった語彙が多用されていたが、Jóvérné Szirtes (1982) 全体を通じて、これらの用語はほとんど用いられていない。ラーコシ・マーチャーシュ個人の名を最前に出した語彙が使われるようになっている。

本書によれば、1955年にナジ・イムレが首相(第一次内閣)の座を追われ、党からも除名されたことを受け、「再びラーコシ派が台頭した」。しかし、(本書で新たに言及されるようになった事件でもある)「1956年6月に、ポーランド・ポズナンで巻き起こった運動」や、「ラーコシ一味」が「自身の経験から学習することもなく、かつての過ちを繰り返した」ことの影響によって、「党の危機は深刻化し、党内外の右派勢力は力を増していった」。このように、「56年」前夜における、「修正主義者たち」あるいは「ナジ・イムレ周辺」の負のイメージが軽減されている一方で、旧指導部の犯した過ちの重大さを際立たせるような説明が展開されているのである。ちなみに、名指しによる批判はラーコシだけにとどまらず、1956年7月の中央委員会で党除名処分を受け、法の裁きを受けたファルカシュ・ミハイ²¹の罪責についても糾弾されている。

④ 第四の主体

Balogh (1975) では、「セクト主義者勢力の失策を克服し、修正主義者の攻撃を打破」する可能性を秘めた第四番目の主体、最も英雄的な主体として、「勤労者党レーニン主義者勢力」が登場していた。Jóvérné Szirtes (1982) では、これに類似した用語は使われていないものの、興味深いことに、「修正主義者」・「ラーコシ派」のどちらにも属さない主体語彙を幾つか確認できる。

新たな中央委員には、思想闘争で糾弾されたことのある古参の労働運動政治家(カーダール、マロシャーン²²、カーライ、メゼー・イムレ²³)も選出されたが、抜本的な政治改革は行われなかった。ナジ・イムレも政界復帰を果たした。6月の委員会決定は、国内政治の緊張状態を緩和するものではあった。しかし、指導部は、過去に行われた裁判の結果について意見の一致をみることがなかったため、迅速かつ決定的な行動を起こすことはできなかった。このように、7月中旬から10月にかけての時期、政治変革を決定づけるような具体的な処置は、ほとんど取られなかったのである。²⁴

ここでいう「古参の労働運動政治家」とは、その具体例として挙がっている人物名(カーダール、カーライ)を見る限り、Balogh (1975) の「勤労者党レーニン主義者勢力」と、その指示内容はほぼ一致していることがわかる。しかし、この「古参の労働運動政治家」も参加している新たな中央委員会は、「56年」前夜の「国内政治の緊張状態を緩和」することまでは出来たが、「具体的に政治変革を決定づける」には到らなかったという。上掲では、その直接的・間接的理由として、「過去に行われた裁判の結果について意見の一致をみることがなかった」こと、また、間接的な要因として、ナジ・イムレの政界復帰に象徴される、党人事の刷新の不徹底を挙げている。このように、Jóvérné Szirtes (1982) は、「新たな中央委員」=「指導部」にも部分的に非があったことを認めているのであり、「勤労者党レーニン主義者勢力」による改革努力が「セクト主義者勢力」によって妨害されたことのみを専ら強調していた、従前の主張とは著しく異なる。

1.3.2. 経過

① 「反革命暴動」の勃発 (p. 187)

まず、「修正主義者グループ」によって組織された「民衆集会 tömeggyűlés」は、やがて「武装された反革命暴動 ellenforradalmi lázadás へと転化した」とある(「民衆集会」とは、従来の記述で

いうところの「デモ」に相当すると考えて差し支えない)。この説明に続き、従前の記述に見られなかったことであるが、個別の出来事が地名(ペテーフイ像・ベム広場・国会など)とともにいくつか紹介されている。したがって読み手は、「民衆集会」・「デモ」および「反革命暴動」の空間的な展開について、ある程度は把握できるような仕組みになっている。とりわけ、一連の記述の中でも興味深いのは、「反革命グループ」によって国旗から国章が切り取られたこと、党施設の正面から「赤い星」が除去されたこと、さらには「スターリン像」が引き倒されたことが、新たに言及されていることだろう。というのも、同主体の野蛮性、反社会主義的側面を、より論理的に示そうとする著者の姿勢が窺えるからである。とはいえ、これまでどおり、「民衆集会」・「デモ」と「反革命暴動」とを区切るような時間軸上の境界が依然として明示されていないことに加え、「民衆集会」を企画した「修正主義者グループ」と、「民衆の中に紛れて組織されていた反革命グループ」との間に何らかの連関があったのか否かについても、結局のところ窺い知ることができない。行為主体の特定が留保されている以上、むしろ各出来事の野蛮性・反社会主義性が強調されている点にこそ、著者の意図を斟酌すべきかもしれない。

また、これも注目に値することであるが、「民衆の中に紛れて組織されていた反革命グループ」という主体が導入されている上掲の図式は、「修正主義の煽動者」によって企画された「学生デモ」に、「後方で待機している組織の者たちと翌日に行動を起こすことになる、全メンバーが既に紛れていた²⁵」とする Szamuely eds. (1961) の論理と、かなり類似していることもわかる。両者の記述に共通して当てはまることであるが、「民衆」あるいは「学生デモ」に問題の種が紛れていたと主張することは、結果的に、その他大多数の「民衆」あるいは「学生」を、無条件に免罪する効果を持つと考えられる。

② 「反革命」の推移

この部分の記述内容は全体的に記述量が増え、従前のそれと大きく異なっている。ここでは、「56年」前夜のテキスト分析作業に倣って、それぞれの動作主体ごとに分析を行うことにする。

i. ナジ・イムレ (p. 188)

従前の記述では程度の差こそあれ、ナジ・イムレは明らかにネガティブな存在として描かれていた。つまり、彼が「反革命」と直接的あるいは間接的に関与していたことが暗示されていたわけである。しかし、本書では、全体的にそうした傾向が弱められている感が否めない。とはいえ、興味深いことに、これまでの教科書では一切言及されてこなかった論点もいくつか確認できる。

第一は、ナジ・イムレと「ナジ派のメンバーたち」(個人名は明かされていない)の党中央委員会入り、ならびにナジの首相就任という2つの事実について、ナジ・イムレが「反革命運動除去」への参加を約束したことを根拠として挙げている点。つまり、ナジの当初の見解が党当局にとって、決して不都合なものではなかったことが示唆されているのである。²⁶ このような論理を用いれば、「武装暴動」を「反革命」へとさらに悪化させた元凶を、ナジ・イムレと「ナジ派のメンバーたち」の指導力の欠如、唯一点に還元することが可能となるため、彼らの中央委員会入りを許してしまったその他の黨員たちの責任は、自動的に不問とされるわけである。しかし、その反面、ナジと「ナジ派のメンバーたち」を、「反革命勢力」の一部、あるいは煽動者と見なすような読みもまた許されなくなったといえよう。

第二は、ナジ・イムレが「蜂起」を「民族民主主義革命」と定義した²⁷ことを引き合いに出して、「労働者勢力(を守る力)」に対する「修正主義者たちの執拗な攻撃」を招いてしまったと論じている点。ナジ・イムレと「修正主義者たち」の関係こそ明らかにされていないが、この内容が新たに述べられていることの意義は大きい。まず、「56年」当時(には少なくとも)、所謂「反革命勢力」を「革命」と見なし、「労働者勢力」を「革命の敵」と見なす風潮が存在していたことを本書は公式に認めている。これは、「反革命家たちの、『革命に向けた』弁明によって、社会主義信奉者たちは欺かれ、麻痺させられ、ナショナリズムとファシズムの潮流の前に、資本主義への門が広々と開かれてしまった²⁸」とする、Balogh (1975) の流れを汲むものと考えられるが、「反革命家」ではなく「蜂起参加者」たちが、「労働者勢力」に対して攻撃を加えたと明示されている点、従来の図式とは大きく異なっていることがわかる。また、以上の紹介だけでも、「暴動」と「蜂起」という2つの用語が、著者によって使い分けされている点も興味深い。これは、「人民蜂起」と「反革命」が同時に存在していたとする、カーダールの主張を髣髴とさせるものである。²⁹

ii. 「修正主義者たち」(p. 188)

「修正主義者たち」については、10月26日に党中央委員会によって決定された「共産主義者の武装化」の実施を、「軍隊の組織内部に居合わせた」者たちが妨害しようとした事例、あるいは既に見たように、ナジ・イムレの「民族民主主義革命」論を受け、「労働者勢力」を攻撃した事例が挙げられている。しかし、10月末に「複数政党制が復活し、連立政権が組織された」頃から、「修正主義者たち」もまた共産主義者であるがゆえに、「ブルジョア復古勢力」によって排除されるようになったという。複数政党制、連立政権³⁰が一時的に復活したという史実が、初めて取り上げられるようになったことも大きい。ここまで明確に、「修正主義者たち」と「ブルジョア復古勢力」とを区別して把握している記述には目を見張るものがある。別な見方をすれば、「修正主義者たち」もまた「共産主義者」の亜流に他ならないことを取って確認しているわけであるが、これは、彼らを限定的に免罪する効果を見込んでのものと考えられなくもない。つまり、最も忌むべき対象は「ブルジョア復古勢力」であるということ、読み手に強く印象付けようとしているのである。

iii. 「武装集団」(p. 188)

「武装集団」は「反革命分子」ともいい換えられている。10月26日、ブダペシュトの「大部分の地区で党委員会の建物を急襲、破壊し、共産主義者の抵抗運動の拠点が整備されるのを妨げ」たほか、武力に劣る「各工場の守衛たち」をその支配下に置いたという。本書が新たに、「各工場の守衛たち」をテキストに登場させた背後には、「労働者評議会」の取った行動の「反革命」性を暴きだそうとする意図も読み取れる。

さらに、記述によると、「労働者評議会」は、あくまで「共産主義者」(場合によっては「修正主義者」の可能性もある)によって組織されたのであって、「反革命分子」は謂わばそれを横領し、「反革命」に利用したという。この図式は、「やがて反革命側の抗争を指揮し、自身は『労働者評議会』と称しながらも、実際は反革命政策を継続中であった団体³¹」と評している Balogh (1975) とは、だいぶ主張の方向性が異なることがわかるであろう。「労働者評議会」に対する批判的評価は軟化しているのである。

iv. ミンツェンティ枢機卿 (pp. 188-189)

幽閉中の身から解放された枢機卿は、「以来、あたかも将来の権力者であるかのような役柄を演じようと努めた」という。テキストはさらに、11月3日のラジオ演説で、枢機卿が「地主の復活に賛成の立場を表明した」ことを引き合いに出して、当時「実際に資本主義体制が復活するおそれが存在していたこと」を強調している。つまり、枢機卿は「資本主義」により近い存在として描かれているわけである。しかし、枢機卿はこの演説で自身は無党派であることを宣言した上で、「私有財産の制限を設けた上で、ハンガリーが文化民族主義によって特徴付けられるような国民と国家になるべきである」と述べてはいるものの、明確に「地主の復活に賛成の立場を表明した」わけではなかった。枢機卿の違法性を客観的に証明しようとした著者の意図を読み取れないこともないが、当時のラジオ記録を参照する限り、枢機卿が「地主の復活に賛成の立場を表明した」という見解は、穿った見方と判断せざるをえない。³²

また、先に確認したように、本書は「修正主義者たち」を、最終的には「共産主義者」として定義している。こうした見方に基づくならば、「反革命」の主体は自動的に、反「共産主義者」、すなわち資本主義に特定されることになる。枢機卿は、謂わば「資本主義の復古」の象徴として持ち出されているわけである。

vi. カーダール・ヤーノシュ (p. 188)

繰り返しになるが、従前の教科書では、「56年」前夜ないし経過部分におけるカーダール・ヤーノシュの行動について言及されることはなかった。しかし、本書経過部分では、カーダールの名が登場する。

10月25日、勤労者党は新たな党第一書記にカーダール・ヤーノシュを選出した。

カーダールは、同日、ラジオ演説を行い、「自然発生した *bekapcsolódott* 反革命家たちは、23日のデモ行進を反人民民主主義的な武装攻撃へと変質させた。制圧する必要がある」と述べた。³³

上のカーダールの党第一書記就任についての言及から、読み手は少なくとも、カーダールが「56年」当時の党指導者の1人であったことを知り、彼がナジ政府とも少なからず関係を持っていたことも推測できるはずである。10月中のカーダールの動静について一切触れていなかった従来の教科書の記述状況を顧慮するならば、Jóvérné Szirtes (1982) では、著者の側から敢えて当局にとって不利な情報を提示し、さらにはこれに挑戦しようという意気込みが感じられなくもない。実際、この記述に続く、カーダールが「反人民民主主義的な武装攻撃」の制圧の必要を訴えたことを確認する内容から、著者の巧妙なレトリックを読み取ることができる。というのも、上のカーダールの発言は、先に見たナジに関する記述(「蜂起」を「民族民主主義革命」と定義した)とパラレルの關係にあり、これと対比されることで、それなりの効果を発揮することになるからである。

また、24日に首相に就任したナジ・イムレおよび彼の内閣について、著者は「毎日のように閣僚の人事異動が行われた」ものの、「武装暴動はしかしながら、除去されることはなく、それどころか、徐々に反革命へと悪化した」と評している。つまり、Jóvérné Szirtes (1982) は、「56年」当時、カーダールとナジが互いに近い位置にいたことまでは認めているが、それでもなお2人の政治

家の間には、超え難い決定的な思考上の相違、ならびに指導力の差が存在していたと主張してやまないのである。

1.3.3. 結末・評価

① 「革命労農政府」の成立 (pp. 189–190)

「新しい革命の拠点」、すなわち「カーダール・ヤーノシュを首班とするハンガリー革命労農政府」がソルノクで誕生し、同政府にミュンニヒ・フェレンツ³⁴、マロシャーン、カーライ、ピスク・ベーラ³⁵らが参加していたことが、まず述べられている。Balogh (1975)に見られた、「社会主義革命の継承者」という表現はもはやなされていないが、「ナジ・イムレと彼のグループによって裏切られた社会主義の実情を打破した」ことが述べられている。これは、ナジが10月26日に「蜂起」を「民族民主主義革命」と定義したことが、結果として「労働者勢力の駆逐への道を開くことになった」という論理が前提になっているように思われる。

次に、11月4日にカーダールが、「新たに成立した対抗政府 *ellenkormány* の名において、ラジオ演説を行い」、「新政府樹立の必要性を弁明、綱領を発表し、反革命制圧の助けをソヴィエト赤軍に要請したことを伝え、国家の労働者たちに反革命に対抗するよう呼びかけた」とする内容が続いている。実際にカーダールが行ったラジオ演説も引用されている。しかし、従来の教科書が用いていたようなソ連軍の援助要請の根拠 [Szamuely (1961): ワルシャワ条約、自国軍の混乱状態; Balogh (1975): プロレタリア国際主義] は、すっかり影を潜めてしまっている。

② 「反革命」の制圧 (p. 190)

「反革命」は、「ソ連軍の一団、ならびに社会主義を目指す、真のハンガリー人の武力実践によって」、わずか数日で「分解した」ものの、「反革命家たちが多かれ少なかれ拠点を有していたブダペシュトにおいてだけは、激しい衝突が起こった」という。こうした状況について、「ブダペシュトでの物質的な損失は甚大であったし、それ以上に痛ましかったのは人的な犠牲であった」と評している。ちなみに、従前の記述を振り返ってみると、「反革命」制圧は、Szamuely eds. (1961)では、「ソ連軍による、2度目の我が人民の解放」と位置づけられていたが、Balogh (1975)では、もはや同事象についての評価は下されていなかった。したがって、制圧過程におけるソ連軍の功績について、10数年ぶりに取り上げられたことになる。

しかし、Jóvérné Szirtes (1982)は、ソ連軍の功績だけでなく、「社会主義を目指す、真のハンガリー人の武力実践」があったことも重視している。これは、「革命労農政府」の「反革命」闘争が、国民から広く支持されて進められていたことを印象付けるためであろう。つまり、「社会主義」の実現を「真のハンガリー人」の最大の目標として位置づけることにより、「反革命」闘争は、論理的に正当化されるだけでなく、祖国解放戦争としての付加価値を持たせようという意図もあるのではなかろうか。事実、このような図式を用いるならば、「反革命」勢力は自動的に矮小化されて捉えられるようになり、「人的な犠牲」は「真のハンガリー人」(あるいはソ連軍)の犠牲者と同義と見なせるようになってしまう。こうして、「56年」制圧過程で生じた全ての犠牲者に対して、無条件に哀悼の意を表せる状況が生み出されているのである。場面こそ違おうが、「反革命勢力による攻撃は、首都の党委員会共和国広場支部に対しても行われ、守備側の大部分を惨殺した³⁶」という一

文に代表されるように、専ら当局側の犠牲についてのみ言及するにとどまっている Balogh (1975) と対照してみても、犠牲者に対する姿勢の違いは歴然としている。

なお、Balogh (1975) でも述べられていたことであるが、「反革命に自発的に tudatos 参加した者と、ただ押し流されてしまっただけの民衆、騙されてしまった民衆³⁷」を厳格に区別した上で、「当初は厳格な懲罰によって処理し、後には寛容な説得によって勝利」が収められたことにも触れられている。

③ 労働者党による「10月事件の分析」(p.190)

従前までの教科書には見当たらない箇所であるが、本稿の「はじめに」で触れた56年12月の公式見解の内容紹介である。ここでは、主たる4つの要因の紹介にとどまらず、それらの相互関係についても触れられている。「ラーコシ=ゲレー派による教条主義政治」が排除されたことが時系列的に最前に置かれ、これに促される形で、ナジ・イムレおよびロションツイ・ゲーザの台頭と、諸勢力による煽動行為が激化したと説明されている。

しかし、これまで見てきた本書の記述では、「ラーコシ=ゲレー派」の失脚そのものよりは、むしろ彼らが犯したとされる政治経済上の失策の方に焦点が当てられていた。また、彼らの失脚を受けて、カーダールをはじめ「古参の労働運動政治家」たちが新たに党中央委員会入りをしたものの、その時点で具体的な政治改革が行われなかったことなども指摘されていた。したがって、Jóvorné Szirtes (1982) は、56年12月の公式見解を補足的に紹介し、また実際これに依拠して論が組み立てられてはいるものの、執筆当時の当局第一人者でもあるカーダールとその周辺の人物が担った役割をも考慮に入れ、「56年」の要因をより広い視角から精密かつ総合的に分析し、解説しようと試みていることがわかる。

なお、上掲ではロションツイの個人名が登場している。ロションツイは、ナジ政府に入閣する以前は、ジャーナリストとして活躍していた人物である。読み手は、彼こそが党外部に対して煽動を行った代表的な人物であると理解することになるだろう。だが、興味深いことに、これ以前のテキスト中、あるいは従前の教科書記述においても、彼の名前は一度も登場していなかった。このことを考慮すれば、本書当該箇所でのロションツイへの言及は、56年12月の公式見解を忠実に紹介し、ナジの名と併記することによって、従来までのナジにのみ焦点が当たるような表現を改め、煽動行為の責任所在を拡散させるための一手段として期待されたものだったとも考えられる。

2. ハンガリー社会主義体制と歴史教育——「56年」言説の分析を通じてわかること

以上の分析作業から、ギムナジウム歴史教科書の「56年」記述は、改訂や著者の交代を期に、少なからず変更が施されてきたことは明らかであろう。しかし、ここで、本質的な疑問、批判が筆者に向けられる可能性がある。それは、これまで取り上げてきた社会主義期の教科書は、(改訂版を除けば)3種類とも著者が異なるがゆえに、3者の間に見られる差異を、単に記述の変更箇所として捉えても良いのか——という問題である。教科書記述の比較研究を行っている以上、この問題は避けて通れない。

もちろん、それぞれ著者が異なっている以上、これらの教科書記述間の差異は、厳密な意味にお

いて、もはや変更といえないであろう。しかし、カーダール時代を通じて、中等教育の歴史教科書は全て国定のものであり、しかもギムナジウム対象のものは、各年度に1種類だけしか採用されていなかった事情を考慮するならば、3種類の教科書記述の差異を、変更と呼んで差し支えないと筆者は考える。というのも、これらの教科書は全て、労働者党政府によって検閲済である以上、当然記述の細部にまで当局の指導が行き届いていると予想されるからである。すなわち、教科書記述は、執筆者の見解というよりはむしろ、当局の歴史教育政策が優先的に反映されるものと考えられるべきである。したがって、著者交代による教科書間の記述の差異は、(当局の意向に基づいた)変更と見せると筆者は判断した。

何はともあれ、カーダール時代の3人の編・著者による教科書記述はどれも、「56年」を最終的には「反革命」と評価し、「革命労農政府」の成立とソ連軍の「援助」によってこれが制圧されたとする、56年12月の公式評価に基づいたプロットで書かれている。しかし、「56年」における個々の主体、事象の記述へと注意を向けると、著しい差異も所々存在していた。それでは、カーダール時代の歴史教科書における「56年」記述の変更は、一体どのような理由から行われたのだろうか。本稿を終えるにあたり、これについて推察し、本作業から明らかになる論点についてまとめてみたい。

教科書記述変更の背景として想定される要因は、1. 教育政策の変容、2. カーダールの「56年」論の変化、3. 対外政策の変化、4. 教科書の出版時期、以上の4点に求められる。

2.1. 教育政策の変容

カーダール時代、1965年と78年の2度に渡って、新カリキュラムが導入され、その影響で指導要領も刷新されている。³⁸ とりわけ、78年の変化は大きく、歴史科の年間授業時間数は87時間から112時間へ拡大された。これに伴って、82年に使用が開始された Jóvérné Szirtes (1982) では、「56年」の記述量そのもの、あるいはグラフ、写真といった資料の数も急激に増大している。

2.2. カーダールの「56年」論の変化

カーダールは「56年」を自ら語ることを最大限活用し、当体制が「社会主義の継承者」であることを国民に対して印象付けると同時に、ソ連に「援助」要請をした事実、ならびにナジ政府を打倒した事実の正当化を絶えず試みてきた指導者であった。まず彼は、「56年」を「人民蜂起」と「反革命」が混在する状況として把握し、自身が依拠して立つ基盤として「社会主義を目指す真のハンガリー人」を想定することにした。これは、Szamuely eds. (1961)に見られた、「反革命勢力」に対抗する「革命勢力」(「プロレタリア独裁の勢力」、「プロレタリア独裁を目指す忠実なる労働大衆と組合」)の言及は、まさしくこうしたカーダールの見解を反映したものであろう。さらに、例えば「56年」から10数年が経過した72年の段階になると、従来のようなもっぱら「反革命」性を強調する語りは影を潜め、「56年」を「民族の悲劇」と公認する境地に達している。³⁹ 家田修氏によれば、カーダールの「民族の悲劇」論は、同時代的に彼の人気を高めただけでなく、将来の体制転換

期に急加速することになる、「ナジと協力者たち」ならびに「56年」参加者たちの再評価・名誉回復への道を拓くことになったと今日的には評価できる。⁴⁰

カーダールの「民族の悲劇」論の教科書記述への影響は、Balogh (1975) の改訂の段階では確認できないものの、Jóvérné Szirtes (1982) においてはある程度見出すことができる。というのも、本書において初めて、56年12月の公式見解を言及するに当たり、「悲劇的事件」という語彙が登場していることから推察できるからである。また、Balogh (1975) において支配的であった、「修正主義者たち」、あるいはナジ・イムレを、「反革命勢力」の一部と見なすような記述も見られなくなっている。前者は、「民衆集会」を企画した主体として言及されているものの、「反革命暴動」の企画、あるいは煽動への直接的関与については断定を避けており、最終的には彼らを「共産主義者」として認知し、「ブルジョア復古勢力」と明確に区別している。後者に関しては、「蜂起」を「民族民主主義革命」と評した点において批判が向けられているが、Balogh (1975) に見られたように、彼の政府が「反革命的政策」を打ち出したとまでは論及されていない。これらの事例から、ナジ・イムレをはじめとする「56年」の参加者たちの再評価が、公式の場、すなわち Jóvérné Szirtes (1982) が使用されたカーダール時代末期の教育現場においては、既に一定の範囲内で着手されていたことが明らかになった。

2.3. 対外政策の変化

次に取り上げるのは、「56年」記述中の諸外国をめぐる表象についてである。

前章で明らかになったように、「ソ連軍第二次介入」の表象方法、あるいは要請理由は、教科書の種類によって著しく異なっていた。Szamuely eds. (1961) は同件について、「我が人民の解放」というように最高の賛辞を贈るとともに、ソ連軍の人的犠牲についても言及し、要請理由としては、「ワルシャワ条約」を挙げていた。これに対し、Balogh (1968) では、ポジティブな表象はなされず、援助要請の理由についても触れられていない。一方、改訂版のBalogh (1975) では、要請理由を「プロレタリア国際主義」に求めている。そしてJóvérné Szirtes (1982) は、新政府樹立と「反革命」制圧の必要性を根拠として挙げている。このように、当箇所では、記述変更が毎度のように行われてきたことがわかる。

この背景には、ハンガリー当局のソ連に対しての配慮があったと推測できないだろうか。というのも、Szamuely eds. (1961) の使用された当時の状況に思いを巡らせるならば、ソ連の軍事「援助」のゆえに——良くも悪くも——カーダール体制は発足しえたというコンセンサスが一般に成立していたと考えられる。そのため、Szamuely eds. (1961) では、ソ連軍を熱烈に称える記述がなされたのであろう。しかし、元来、読み手＝国民の反感(伝統的な反口感情)を買いかねないこうした表現は、著者の交代期に伴って削除され、また、「第二次介入」の根拠として挙げられていた「ワルシャワ条約」も、ソ連以外の東欧諸国が軍事介入しなかったという列記とした歴史的事実の前に説得力に欠くものと見なされ、削除を余儀なくされたのではないか。一方、Balogh (1975) における、要請理由としての「プロレタリア国際主義」の追加は、68年のプラハ出兵事件を意識してのものと考えられるだろう。つまり、これを根拠として持ち出すことは、プラハ以後にブレジネフ

が掲げた制限主権論に賛同を示し、と同時に「56年」においてソ連軍が演じた役割についても正当化することに繋がるからである。加えて、当初チェコスロヴァキアの改革状況に理解を示しているながらも、最終的には派兵を決断したカーダール政府の対応をも、間接的に弁護する効果も見込まれているように思われる。なお、Jóvérné Szirtes (1982) の段になると、もはや「プロレタリア国際主義」についてさえ言及されず、「56年」当時に「革命労農政府」が主張した要請理由(「新政府樹立の必要性」)をそのまま引用するにとどまっている。

そして、もう1点。教科書の変更に伴い、「帝国主義」の指示対象が次第に漠然化したことを確認しておこう。Szamuely eds. (1961) では、「米国と協同歩調を取る」、「自由ヨーロッパ放送」といった対象を限定する語句が用いられていたが、Jóvérné Szirtes (1982) では「外国帝国主義グループ」と指示するだけである。このように「帝国主義」の記述が寛容になった背景には、68年にハンガリーで新経済メカニズムが導入されて以降、西側諸国からの借款が増大するなど、それら諸国への経済的依存度が高まったことが挙げられるはずである。奇しくも、オイルショック以降、年間経済成長率が1-2%にまで落ち込み、「56年」以来の経済不況を迎えていた当時のハンガリーでは、借款ならびに対西側貿易の必要性は年々大きくなっていった。⁴¹ こうした同時代的な政治・経済状況を考慮するならば、西側援助国を刺激するような表現が、極力避けられるようになったことにも合点が行く。このことは、(註15に挙げたように)「米国の反共プログラム」の詳細記述が、Balogh (1975) の改訂で削除された事実などによっても、象徴的に見て取れるだろう。

2.4. 教科書の出版時期

最後に要因として挙げたいのは、教科書が出版された時期の違いである。いい換えるならば、各教科書が「56年」からどれだけ時間が経過した時点で執筆、あるいは使用されたのか。この時期の違いが、記述に差異を生じさせているのではないか——という仮説である。

そもそも、カーダール時代のギムナジウム歴史教科書は、社会主義当局から指名された歴史学の研究者によって執筆され、検閲を経た後、教科書出版 Tankönyvkiadó から出版されている。当然、読み手としては、生徒＝ハンガリー国民が想定されている。したがって、教師・教科書という媒体を通じて、当局が生徒に語りかけるという、知の再生産の図式が成立するのである。しかし、当然のことながら、知識を消費する側の読み手(生徒)の年齢は年々、世代交代し続けるものである。したがって、再生産の図式そのものは不変であっても、授業や教科書は彼らの内実の変化に対応していく必要に迫られていたはずである。

例えば、Szamuely eds. の第2版が出た61年にギムナジウム第4学年に当たっていた生徒は、「56年」を12-13歳で体験しているが、Balogh の初版が出た68年の生徒は当時7-8歳、Balogh の改訂版が出た75年の生徒に到っては、まだ0-1歳に過ぎなかった。したがって、彼ら以降の生徒にとって、「56年」は自身の体験外の出来事、もはや完全に観念上の歴史的事件であるということになる。このことを考慮するなら、60年代前半までの生徒に対するのと同様の教授内容を70年代以降の生徒にも適用させることは、世代によって「56年」の記憶のされ方や印象が異なっている以上、到底理に適っているとはいえない。

筆者は、Balogh (1968) 以降の教科書で、「セクト主義者グループ」の犯した政治的過失を断罪する記述が増え続けている点、またこれとは逆に Jóvárné Szirtes (1982) で、「ナジ・イムレと同行者たち」あるいは「修正主義者たち」に対する批判が急激に鳴りを潜めている点こそ、読み手の世代変化を意識した変更措置であると考えている。「56年」から数年で出版された Szamuely eds. (1961) は、カーダール体制の正統性を緊急に国民に知らしめる必要から、「56年」におけるナジ政府の違法性、「反革命」性を示すことが至上課題であったと考えられるため、彼らへの批判が「セクト主義者グループ」への断罪に優先して行われている感がある。しかし、ある程度年月が経過し、体制の基盤が安定化して以後の教科書では、カーダール体制の有能さを強調するためであろうか、反面教師としての「セクト主義者グループ」の過ちを前面に出した記述が目立つようになっている。また、「修正主義者たち」の記述が Szamuely eds. (1961) 以来、減少の一途を辿ったのは、当局の「56年」参加者に対する基本姿勢が、「報復」から「忘却」へと転換していったことと大いに関連があるように思われる。⁴²

おわりに

カーダール時代の教科書における「56年」記述は、以上のような理由から変更が度々加えられてきたと総括できる。別言すれば、本稿では一連の記述変更を目で追ったことで、教科書の執筆者側の事情についてある程度明らかにすることができたわけである。この成果を有効利用するためにも、次なる課題として、今度は読み手側の事情——各教科書の記述が読み手(生徒)にどのように受け止められたのか——の考察に取り組みねばならないだろう。また同様に、実際の授業現場で、教師によってどのように当該教科書が「教材」として用いられ、授業が行われていたのか——を吟味することも不可欠となる。というのも、「執筆者——教師——生徒」の三者間関係から問題を捉え直すことによって新たに、教科書の記述変更が教授/学習にもたらした影響を窺い知ることができるからである。

疑問はまだ尽きない。社会主義期の歴史科において、教授内容ないしは教科書記述の大きな変化が認められるトピックは、果たして「56年」だけだったのか。また、ギムナジウム歴史教科書における「56年」記述の変化を辿っただけで、社会主義体制の歴史科教育政策の全体像が浮かび上がったといえるだろうか。最初の疑問に対処するには、言説分析の対象とするトピックをさらに広げていく必要があるだろう。第二の疑問については、ギムナジウム以外の教育機関で使用された歴史教科書をも分析対象にすることによって対応することが可能である。当然のことながら、教育機関が異なれば、教育目標もまた異なる。つまり、たとえ同一教科であっても、ギムナジウムとそれ以外の教育機関では、教授内容、場合によっては教授方法も異なっている可能性が否めないのである。全ての教育機関を視野に入れて、同一のトピックについて、徹底的にテキスト分析ないしはその比較を行うこともまた必要である。また、ハンガリーに留まらず、社会主義国をはじめとした他国の教育現場において、「56年」および類似の反体制暴動がどのように教授されていたのかについて、いくつかのケース・スタディが集まれば、社会主義ハンガリーの教育事情の特殊性を、比較教育の視点から相対化して吟味することもできるだろう。今後の課題としたい。

注

1 1990年5月8日、「1956年の革命、および自由への闘争を記念する法律(第XXVIII号)」が公布された。同法は、「1956年の革命、および自由への闘争の記憶を、法によって神聖化」し(第一項)、「1956年の革命、および自由への闘争が開始された日であり、また、ハンガリーが共和国宣言を行った日でもある、10月23日を、国民の祭日として宣言」(第二項)している。Király Béla & Congdon, Lee W., *A Magyar Forradalom Eseméi: Eltíprásuk és Győzelmük (1956–1999)* (Budapest: Atlanti Kutató és Kiadó Társulat-Alapítvány, 2001)『ハンガリー革命の思想 抑圧と勝利(1956–1999年)』、p. 517.

2 例えば、堀林巧『ハンガリーの体制転換—その現場と歴史的背景—』(晃洋書房 1992)、188頁。

3 教科目標については、Bencédy József, *Tanterv És Utasítás: A Gimnáziumok Számára Történelem* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1965)『教育計画と指導 ギムナジウム生徒のための歴史』、p. 3; Oktatási Minisztérium, *A Gimnáziumi Nevelés és Oktatás Terve* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1978)『ギムナジウム訓練・教育計画 歴史』、p. 99; Falus Andrásné eds., *A Gimnázium Nevelés és Oktatás Terve: Történelem* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1984)『ギムナジウム訓練・教育計画 歴史』、p. 3を参照。

4 カーダール政権の「報復」体制としての側面を描き出した精緻な研究としては、Zinner Tibor, *A Kádári Megtorlás Rendszere* (Budapest: Hambas Béla Kultúrakutató Intézet, 2001)『カーダールの報復体制』などが挙げられる。

5 Nyysönen, Heino, *The Presence of the Past in Politics: '1956' After 1956 in Hungary* (Jyväskylä: Jyväskylä University Printing House, 1999), p. 87.

6 ジャーナリスト。1956年10月30日、国務大臣としてナジ政府に入閣する。1957年、逮捕され、獄中で没した。Nové Béla ed., *Kortárs Krónika 1956* (Budapest: Krónika Nova Kiadó, 2001)『1956年 年代記』、p. 200.

7 Nyysönen *op. cit.*, pp. 88–89.

8 1956年12月の党公式評価は、翌57年に閣議情報局から出版された『ハンガリー 10月事件における反革命勢力 全4巻 *Ellenforradalmi erők a magyar októberi eseményekben I–IV*』で体系的にまとめられている。Nyysönen *op. cit.*, pp. 92–97.

9 「56年」以後、60年までに出版されたギムナジウム第4学年用歴史教科書には、「56年」に関する記述は一切見当たらない。Szamuely Tibor ed., *Egyetemesek Történelem (1849–1945) A Gimnáziumok IV. Osztálya Számára* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1957)『世界史(1849–1945) ギムナジウム4学年用』、あるいは Incze Miklós, *A Magyar Nép Története IV Resz: 1919–1948* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1958)『ハンガリー国民史4 1919–1948』、などの書名からも明らかなように、従前の教科書が扱う時期対象から「56年」は外れている。

10 改訂版は93年まで用いられた。国定教科書制度は転換期に廃止されたが、依然としてほとんどのギムナジウムで同一の教科書が使用されている。なお、94年以後は Salamon Konrád, *Történelem IV. A Középiskolák Számára* (Budapest: Nemzeti Tankönyvkiadó, 1994)が主流となっている。

11 カーダールの名は、「56年」以前の記述においては既出である。1956年7月の労働者党中央委員会における決定によって、「個人崇拜の時期には指導部を迫られていた、カーダール・ヤーノシュ、カーライ・ジュラ、メゼー・イムレ同志が、中央委員会メンバーに選ばれた」と述べられている。Szamuely Tibor, Ránki György és Almási János, *Történelem Az Általános Gimnáziumok IV. Osztálya Számára IV. Kiadás* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1961), p. 276.

12 Nové ed., *op. cit.*, p. 198.

13 ここで言及されている、2度目の「解放」に対するその「1度目」とは、10月23日深夜から、10月24日未明にかけての、所謂「ソ連軍第一次介入」と捉えるべきではない。「ファシズムの脅威から」の「解放」と換言されていることから、むしろ、第二次大戦末期に、ナチス・ドイツによって占領状態にあった国土を「解放」した事例こそが、「1度目」と想定されているのである。

14 Nyssönen, *op. cit.*, p. 76.

15 Balogh (1968) では、米国の反共プログラムを説明するものとして、RCA 社のデヴィッド・サーノフ David Sarnov の言を引用している。「よく組織化され、よく計画された反共組織について調査するために、相当な力が注ぎ込まれる必要があった。…いくつかのケースでは、将来訪れるであろう危機の時期に際して、彼らが指導者として国に戻る可能性を存分に確保してやる必要があった。移民の中で、官僚集団を形成しておかねばならない。そして、彼ら 10 人から 100 人が動くことによって、その集団は、相応の状況、瞬間への心構えができるであろう」。Balogh (1975) では、この引用は削除されている。Balogh Endre, *Történelem A Gimnáziumok IV. Osztálya Számára IV. Kiadás* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1968), p. 300; *VIII. Kiadás* (1975), p. 318.

16 「帝国主義」による資本主義の復古は、2つの段階を経て達成される。つまり、「社会主義を信奉する民衆 tomeg を惑わす目的から不可欠な、いわゆる民族共産主義段階」を経て、「完全なるブルジョワ復古」が成し遂げられるという。Balogh (1975) *op. cit.*, p. 318.

17 Balogh (1968) では、この記述に、(修正主義者たちの)「政治活動によって、帝国主義の助けを得て秘密裏に組織化されていた資本主義復古勢力の基盤が素早く拡大されたのだった」という一文が続くが、Balogh (1975) では削除されている。Balogh (1968), *op. cit.*, p. 300; (1975), p. 319.

18 Balogh (1975) *op. cit.*, p. 318.

19 1965年6月30日から67年4月14日の期間、首相を務めた。Király eds., *op. cit.*, p. 533.

20 エステルゴム司教。1948年から56年までの期間、監禁状態にあった。ソ連軍第二次介入の際、米国大使館に非難したが、71年には国外退去を命じられている。Király eds., *op. cit.*, p. 542.

21 旧指導部の一人。1948–53年まで期間、国防大臣を務めた。Király eds., *op. cit.*, p. 536.

22 労働者党ブダペシュト党委員会書記。「56年」のブダペシュト党本部の攻防戦において死亡。Király eds., *op. cit.*, p. 541.

23 1956年11月4日に成立した「革命労農政府」では、國務大臣として入閣している。Nové ed., *op. cit.*, p. 170.

24 Jóvérné Szirtes Ágota, *Történelem A Gimnáziumok IV. Osztálya Számára: A Legújabb Kor Története* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1982), p. 187.

25 Szamuely eds. *op. cit.*, pp. 277.

26 10月24日12時10分、ナジは演説を行っているが、その際、当時の状況を「反革命」とは定義していない。彼は、全体的に見れば平和的な性格であったデモの参加者の中に、労働者を反人民民主主義へと煽動する敵対分子が紛れていたと論じるに終始し、戦闘終結を呼びかけたのである。Nyssönen, *op. cit.*, p. 61; *A Forradalom Hangja: Magyarországi Radioadások 1956. Október 23–November 9.* (Budapest: A Szabadság Kiadó és a Nyilvánosság Klub Közös Kiadása, 1989) 『革命ラジオ ハンガリーのラジオ放送 1956年10月23日–11月9日』, pp. 31–32.

27 Nyssönenによれば、ナジ・イムレが最初に状況を「革命」と定義したのは、10月30日14時28分のラジオ演説であった。ナジは、「我が祖国では革命が広がっており、巨大な民主化運動が、祖国を岐路に立たせている」と述べている。Nyssönen, *op. cit.*, p. 71; *A Forradalom Hangja*, p. 226.

28 Balogh (1975), *op. cit.*, p. 320.

29 例えば、カーダールは11月1日夕方の段階では次のように述べている。「…人民蜂起は分岐点に達した。ハンガリーの民主主義諸党は、その獲得物を強化するよう努力するのか、あるいは反革命に加担するのか、二者択一を迫られている。…深刻かつ憂慮すべき komor és riasztó 危険が存在している。つまり、外国の介入によって、我が国に朝鮮の悲劇的運命がもたらされるかもしれないのである。我が国民と国家の未来、そして運命の上に横たわっている不安は、我々に警告するのである。重度の危険を払拭するためには、あらゆる手立てを尽くさなくてはならない。反革命と復古分子の巣窟を除去し、我々の民主主義体制を永久不変のものへと強化し、一般的な生産、一般的な生活境遇、すなわち平和と秩序、平穩を保障しなくてはならないのだ」。 *A Forradalom Hangja*, pp. 370–371. このようにカーダールの「56年」論では、当初ラーコシ派の圧政に対して発生した「人民」の「蜂起」が、「反革命」へと転じたとする点が以後も一貫して強調されてきた。家田修氏

によれば、カーダールは、「共産主義の裏切り者」ラーコシに対して立ち上がった「人民」と、「反革命」へと転じた「人民」とを、それぞれ別個の「人民」として、すなわち2つの「人民」が存在したと理解するしかなかったという。なぜなら、カーダール政権は前者の「人民」に依拠してはじめて、その正統性を獲得しえた代物であり、仮にその「人民」が「反革命」に転じたというのであれば、もはや彼には依って立つ国民的基盤はなくなってしまうからである。家田修「ハンガリーに見る歴史の断絶と連続—カーダールとイッエーシュの56年事件論を手掛かりとして—」『東欧史研究』第13号(東欧史研究会1990)、87頁。

30 27日の最初の組閣では、かつての独立農業者党員のティルディ・ゾルターン、コヴァーチ・ベーラが政府に入閣している。なお、本書では、「再編された連立諸党は、最良の部類の右翼勢力主導で組織されていたが、かつての『キリスト教政体』の政治家が潜んでいる極右政党も多数組織されていた。地方では、矢十字党の組織化までも始まった」ことも補足されている。Jóvérné Szirtes, *op. cit.*, p. 188.

31 Balogh (1975), *op. cit.*, pp. 321–322.

32 Nyssönen, *op. cit.*, pp. 79–80; *A Forradalom Hangja*, p. 461.

33 Jóvérné Szirtes, *op. cit.*, p. 188. また、ここで引用されているカーダールのラジオ演説の一節は、当時の放送記録によって確認できる。*A Forradalom Hangja*, p. 71.

34 1956–57年、軍事・治安担当大臣、1958–61年、閣議議長を務めた。Király eds., *op. cit.*, p. 542.

35 1955–56年、ブダペシュト第8区の党書記、1957–61年、内務大臣 *belügyminiszter*、1961–62年、首相、1962–78年には労働者党中央委員会書記を歴任している。Nové ed., *op. cit.*, p. 194.

36 Balogh (1975), *op. cit.*, p. 320.

37 Balogh (1975), *op. cit.*, p. 320.

38 65年の指導要領では、第7章「2つの世界体制の成立と抗争(1945年–現在)」、第3節「ハンガリーにおける社会主義の建設」のなかの細目の1つとして、「1956年の反革命」が登場している。同要領は、年間の総授業87時間のうち、12時間を第7章に割り当てている。このことから推測して、「56年」に費やされる時間数は、1授業時間にも満たなかったと考えられる。一方、新カリキュラムと同時に導入された78年の指導要領を見てみると、年間総授業時間112のうち、最大の28時間が、第7章の「ハンガリー、社会主義への道(1945–75年)」に割り振られている。従前に比べて、戦後史を扱う時間数の割合が大幅に増しているのがわかるが、とはいえ、これに応じる形で「1956年の反革命」に割かれる時間までもが大幅に増加したとは考えにくい。というのも、この章の教育内容は、もっぱら「反革命制圧後の社会主義労働者党政治」、「経済・社会・文化生活における労働者党の役割」に重点が置かれているからである。確かに、歴史教科書における「56年」記述は、改訂や執筆者の交代に際して、一定程度の増加を示したわけであるが、その扱われ方はあくまで消極的であり続けた。つまり、生徒にマルクス＝レーニン主義的思考方を根付かせるという最重要の教科目標を実現するためには、体制が危機に瀕した「56年」の詳細について教授するよりはむしろ、教義に忠実に従って政治実践を行っていた(と自負する)労働者党政権について多くを語る方が、当局にとっては有効な手段であったと考えられるからである。参考までに、各教科書で扱われている「56年」記述のおよその分量も、次のとおり示しておく(「56年」記述の頁数/総頁数)。Szamuely (1961): 3/288, Szamuely (1965): 3/360, Balogh (1968): 4/318, Balogh (1975): 4/337, Jóvérné Szirtes (1982): 6/229. なお、Balogh (1975) までの教科書のサイズは見開き A4 版、Jóvérné Szirtes (1982) は見開き A3 版となっている。Bencédy, *op. cit.*, pp. 17, 20; Oktatási Minisztérium, *op. cit.*, pp. 123–124, 127.

39 家田氏の指摘(家田、前掲論文、77頁)によれば、1972年5月26日、カーダールは自身の還暦に際して次のように述べている。「非常に深刻かつ危機的な状況が、1956年に生まれた。それは、学問的には反革命と呼ばれているものである。我々は、これが1956年に起こった出来事の学術的定義であるということは知っている。だが、我々の誰もが受け入れられるような、もう1つの呼び方がある。あれは、『民族の悲劇』だったのである」。Gyurkó László, *Arcképvázlat Történelmi Hátterrel* (Budapest: Magvető Kiadó, 1982), pp. 221–222; [邦訳]ジュルコー・ラースロー著 家田修・田中一生・南塚信吾訳『カーダール・ヤーノシュ伝 現代ハンガリー史の証人』(恒文社1985)。

40 家田、前掲論文、79–80頁; 家田修「冷戦の時代」南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』(山川出版社1999)、369頁。

41 オイルショック以降の経済低迷は深刻を極め、88年の国民生活状況は、73年の水準にまで後退していた。また、対西側債務は約200億ドルに達し、1人あたりに換算すると、当時の東欧で最大にまで膨れ上がっていたという。堀林、前掲書、195頁。

42 カーダール体制の「忘却」志向については、政治上の「56年」問題(政治的評価、メディアによる表象、追悼行事など)が国内各方面に対して与えた影響の言語論的・記号論的解明を試みている Nyysönen が詳しい。彼によると、例えば1989年の時点で、1958年6月17日に処刑されたナジ・イムレの棺がどこに埋葬されているのか、明確に知る人物は皆無だったという。当局によって意図的に忘却されようとしていたナジの棺は、1908年製の古い地図と古参の墓地職員の記憶だけを頼りに探し出されたという。Nyysönen, *op. cit.*, p. 133.

A Study of the Historical Discourse in Socialist Hungary From the Perspective of '1956' in the History Textbooks for Gymnasiasts

Kei KURAGANE

This thesis analyzes every kind of textbook published during the socialist era after "1956" in Hungary, considering how the descriptions of "1956" in the history textbooks for gymnasiasts were changed and how the intention of the socialist regime was reflected in them.

In December 1956, immediately after the event of "1956", the Central Committee of the Hungarian Socialist Workers' Party (MSzMP) announced the official view, in which "1956" was defined as "counterrevolution". According to this perspective, the event was attributed to the mistakes made by the Rákosi-Gerő group (former Stalinists), the agitations planned by the opponents close to/led by Nagy, the counter-revolutionaries inside the country and the international imperialism.

The contents of the textbooks, however, changed year after year. The first gymnasium textbook dealing with "1956" was written by Szamuely Tibor in 1961. Following it, two other editions were published by Balogh Endre in 1968 and by Jóvérné Szirtes Ágota in 1982. With respect to the amount of description of "1956", there was a slight increase in the 1968 edition, while the 1982 edition, doubled the amount of the 1961 edition due to the enlargement of the book size, including the increased number of graphics, diagrams and notes. It is possible to assume that both of the newer editions were influenced by new curriculums, which had been enacted in 1965 and in 1978 in order to establish specialized education for an individual student or group.

How did the content of the description change?

The description of the edition 1961 can be summarized in the following way: the intelligence organizations of "the western imperialist power going hand in hand with the U.S." and "the revisionists" close to/led by Nagy urged "the counterrevolutionaries" to organize in advance. On the 23rd of October 1956 "the revisionist agitators" organized a student demonstration, and later the struggles started to dominate the party institutions. "The secret center of the revisionists" always had connections with armed forces and took command. Because Nagy's government, so to say "the official center", soon "took off the communist mask and started to walk toward betrayal", "the revolutionary powers" got disbanded and "bloody terrors by the class enemies broke out". "The Hungarian Revolutionary Workers' and Peasants' Government" established on 'the 2nd of November' called for the support of the Soviet army in the country. The Soviet's support with its own sacrifice "liberated the Hungarian people from fascism". Thus "imperialism" and "the revisionists" were supposed to be

superior subject to “the counterrevolutionary powers”, and tended to be regarded as responsible. Moreover, “the Soviet’s second intervention was represented as the most positive event such as “the liberation of the people”.

In the 1968 edition some points were modified. It said that “international imperialism” had opposed “the proletarian powers” in association with “the capitalist-revivalist powers”. What “imperialism” signifies and its role were described more vaguely than in the former edition. “The revisionists” were also called “the counter-revolutionaries”, but no clear boundary between these two can be found. In addition, the political mistakes and the fact that the effort to reform made by “the Leninist groups of the MSzMP” had been prevented by “the sectarian group” were also regarded as a significant cause. “The demonstration” was planned by “the counter-revolutionary / dissident organizations”, not limited to “the revisionist agitators”. Further, it was written that calling for the Soviet’s help had been on the basis of “the proletarian internationalism” rather than “the Warsaw Pact”. It can be said that this description justified the role of the Soviet military forces in “1956” as well as the fact that the Hungarian government dispatched troops to Prague in 1968. What was characteristic of the whole description were its emphasis on the full responsibility of “the counterrevolutionary powers” for the rebellion, and its assertion that only “the Leninist groups of the MSzMP” could be “the followers of the socialist revolution”.

According to the points modified in the 1982 edition, “the international imperialist group” aimed at the agitation in the socialist camp and its dissolution. However, there was no clear definition of the range of subjects which were to be included in this group. It can be interpreted as a sign of consideration for the Western countries, since at the time Hungary’s loans from those countries had been rapidly increasing. “Rákosi-fellows” not only made mistakes repeatedly, but also allowed the extension of the power of the right wing. “The popular assembly”, the same as in the 1961 edition, was described to have been organized by “the revisionists”. Furthermore, this edition depicts the situation at the time, in which, despite the fact that he had promised the suppression of “the counterrevolutionary rebellion”, Nagy viewed “the uprising” positively as “the national democratic revolution”. In this way it could suggest the result that Nagy had led “the working class” to the end, but at the same time, it could avoid labelling him as a “counterrevolutionary” and mentioning his intention. Hence, it implied that the Central Committee should be excused for having allowed Nagy to become the Prime Minister. Additionally, it wrote that “the revisionists” had started to be excluded by “the bourgeois restorers” in the end of October, because they were accounted as essential communists. This view seems to have reflected Kádár’s view stated in 8th May 1972 which had particularly emphasized the tragic result of the event, and liberated Nagy and his followers from being labelled as “counterrevolutionaries”. The support of the Soviet army to suppress “the counterrevolution” was called for out of the necessity of establishing a new government, and “the counter-revolution” broke down because of the Soviet army and of “the true Hungarians seeking for socialism”. Thus, in this 1982 edition, which ceased to emphasize the

coalition with the foreign countries and instead focused on the role played by “the true Hungarians seeking for socialism”, the legitimacy of the Kádár government was represented in the best way.

The survey of the textbooks conducted in this thesis shows that the accounts of the roles played by each subject were not fixed during the Kádár era, although basically they adopted the plot based on the official view. For instance, the tendency to focus on the role played by “the imperialist powers” gradually weakened, whereas the tone of the argument against the political mistakes by “the sectarian group” strengthened. The 1982 edition devalued the role of “the revisionists” and attributed “the counter-revolution” mainly to “the bourgeois restorer powers”. With respect to the people around Kádár, the editions since 1968 characterized them as “the followers of socialist revolution”, who were faithful to Marx-Leninism, and wrote that they were the only ones to take over the reins of the government. It is possible to explain that these changes not only occurred a few years after the turning point of both domestic and foreign policy, educational policy and transformation of Kádár’s view, but had much to do with the new generation of students who had not experienced “1956”.